

# ベーシックサービス

## 政治はいまどんな社会を構想すべきか

# 不易流行

富山経協 講演録 ⑩



一般社団法人 富山県経営者協会 第76回定時総会 講演会

# ベーシックサービス

## ～政治はいまどんな社会を構想すべきか～

講師 井手 英策 氏

（慶應義塾大学 経済学部 教授）



2021年5月27日(木) 富山国際会議場

# ベーシックサービス

## 政治はいまどんな社会を構想すべきか



慶應義塾大学  
経済学部 教授

井手 英策 氏

『富山は日本のスウェーデン』という本を数年前に書かせていただきました。富山にはかれこれ10年以上、年に何回も足を運んで色々な調査をして、本をまとめました。

これまで、あの本についてご招待いただいておりますとお話をさせていただくと、おおむね好意的な評価をいただく感じですが、今日は「ベーシックサービス」と書いています。税金の話をして。特に、消費税の話をするので、おそらく「何を言っているんだ。そんなもの賛成できるか」と思われる方が結構いらっしゃるんじゃないかと思っています。税金の話をするという時点で嫌われますし、特に企業経営者の皆さんは消費税が大嫌いという方も時々いらっしゃるの、これまでせっかく富山の皆さんと仲よくなってきたのに、もしかしたら今日はけんか別れになってしまうんじゃないかという気持ちが少しして、気が重いです。ですが、今からなぜ僕が税金の話をするのかということができる限り丁寧にお話をしていきたいと思っています。

### はじめに — 「ベーシックサービス」を考えた者として

「ベーシックサービス」という言葉について、おそらくほとんどの皆さんはご存知ないのではないのでしょうか。ベーシックインカムという言葉はおそらく聞かれたことがあると思います。全ての国民に現金を配るのが、ベーシックインカム。しかし、僕が今日皆さんにお話をするベーシックサービスは、似ていますが、それとは全く違います。

これは、2018年に岩波書店から出したある本の中で僕がつくった言葉です。僕がつくった言葉ではありますが、今、現実の政治を見ると、僕の著作権なんかまるで無視するかのよう、皆さんが自由にこの言葉を使っているんじゃないかと感じます。

ベーシックサービスとはどういうことかという、人間であれば必ず必要とする、あるいは人間であればきっと必要とするだろうと思われるサービスのことを指しています。今、僕は皆さんに教育的な、知的なサービスを提供しているのであって、お金をあげているわけではないですね。病院に行ってもお金はもらえません。医療サービスをもらいます。介護が必要となったときには介護サービスをもらいます。お金ではなくてサービスです。ですから、あえてはっきり言うてしまうならば、教育や医療や介護、あるいは障害者福祉といったサービス、誰もが必要とするサービスを「ベーシックサービス」と名づけようじゃないかというのが僕の考え方です。

例えば、赤ん坊は生まれてほったらかしにされてしまえば、ものの1週間もしないうちに死んでしまいます。育児や保育というのは誰もが必要とするサービスです。この中で、病院に行かなくていい、一生病気にかからないという人はいません。医療は誰もが必要とするサービスです。年をとって、自分は死ぬまで介護は要らない、一生私は障害者にならないと断言できる人はいません。生まれて死ぬまでに教育なんか要らない、そんなことを言っていたら、しゃべれない、書けない、読めない。このように、誰もが必要とするサービスのことをベーシックサービスと呼びました。

その中で、まず最初に、安倍元首相が一昨年(2019年)に、幼稚園、保育園がお金持ちも含めてただになった。大学は低所得世帯だけが対象だったけれども、こちらもただになりました。まさに幼稚園、保育園、あるいは大学の教育サービス、これはベーシックサービスなんですが、安倍さんはこうおっしゃっています。「幼児教育を無償化いたします。戦後、小学校・中学校9年間の普通教育が無償化されて以来、70年ぶりの大改革です」と。ここではまだベーシックサービスという言葉は出ていません。ですが、これは消費税を増税してベーシックサービスをただにするという政策の、まさに第一歩だったわけです。

これから程なくして、国民民主党の玉木代表がこうおっしゃっています。「医療や教育といった基礎的な行政サービス、すなわち『ベーシックサービス』の無償または安価な提供をする」と。

公明党も石井幹事長がこうおっしゃいました。「ベーシックサービスは『弱者を助ける制度』から『弱者を生まない社会』へと福祉の裾野を大きく広げるもので、ベーシックサービス論を本格的に検討する場を党内に設ける」と。しかも、これはすごいです。給付と負担の両面からというふうにはっきりおっしゃった。

そして、立憲民主党の枝野代表も、「命と暮らしを守る上で欠かせない基礎的なサービス＝ベーシックサービスを全ての皆さんに保障する」と、こうおっしゃっているわけです。

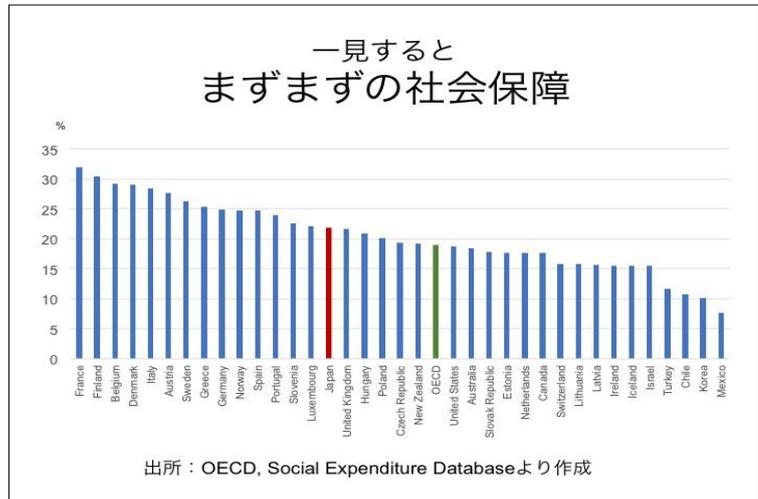
僕も不思議なんです。何でこんな勝手に僕の言葉を使っているのかと。皆さんも不思議だと思えます。こんな言葉、聞いたことないぞと。多分、ベーシックサービスと聞くのは初めてでしょう。だけど、現実の政治にはもうこの言葉があふれ返っています。

ですから、今日はなぜ僕がベーシックサービスを提案したのか、製造者責任と言いますか、言葉をつくった人間として皆さんに説明をしたいと思っています。

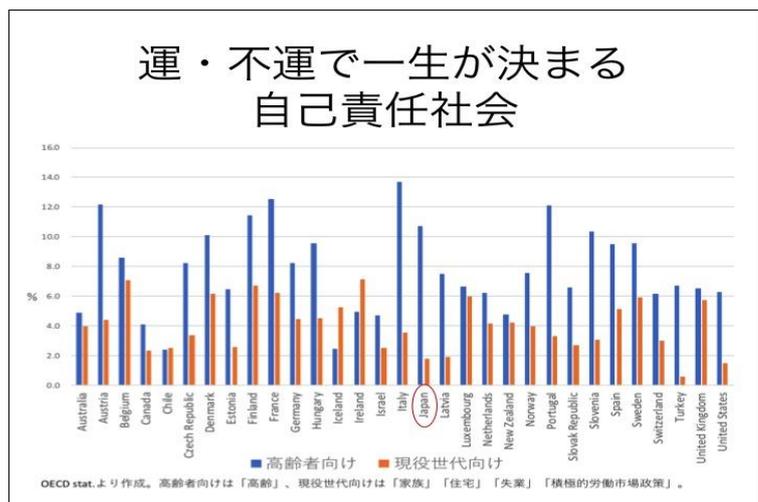
# I 日本の現実

## 日本の社会保障の現実 — 運・不運で一生が決まる自己責任社会

このグラフは社会保障の対GDP比、経済に占める社会保障の割合を見えています。日本の社会保障は、分厚いのか分厚くないのか、どっちでしょう。OECDと書いてあるグリーン線が先進国の平均値ですので、日本（赤線）は先進国の平均よりは少し手厚いかなという感じになっています。ところが、この数字には結構なからくりがあるのです。



青い線と赤い線がご覧いただけると思います。青い線はお年寄りに向かってる社会保障、右横にある小さい赤い線が現役世代に向かってる社会保障です。ここにすごく大きなポイントがあります。



日本の社会保障は、世界の中で結構いい方なんです。ところが、その大部分が医療や介護、年金などのお年寄りに向かってる。そして、働いている人たち、現役世代と呼ばれる人たちに対しては、ほとんど行われていないのです。この中でいうと、アメリカとトルコ、トルコなんかは本当にひどいんですけども、その次に少ないのが日本なんです。

今日は年配の方が多いので、おそらく分かると思います。老後の備え、どうなさいますか。大きな病気をしたときの備えはどうなさいますか。子供が大学に行くときの学費はどうなさいますか。家を買うときのお金はどうなさいますか。全部貯金じゃないですか。この社会は、働いてお金をためて、そして将来の様々な不安に自分の責任、自己責任で備える社会をつくっています。ですから、貯金ができなくなった瞬間にこの社会を襲ってくるのは絶望です。

10年前の2011年4月16日に僕は脳内出血で倒れました。お医者さんが「頭の中の血が止まるかどうか分かりません。止まらなかった場合は、6割の可能性で亡くなります。4割、助かったとしても障害が残るので、今まで通りに働けるとはもう思わないでください」と連れ合いに言ったそうです。

僕はそれを直接聞いていなかったけれども、その日の晩、ベッドで布団をかぶって泣いたのを覚えています。なぜならば、うちは連れ合いが専業主婦ですから、僕がもし倒れて働けなくなったときに、子供がもしも進学したい、大学に行きたいと言っても、ごめんね、うちにはお金がないんだと言わないといけないと分かっていました。こんな社会だということを僕は知っていましたから。

それだけではありません。この社会は絶対におかしいと僕はそのとき思いました。変な日本語を使いますよ。もし僕が運よく死ねれば、家族はみんな幸せになるんです。だって、僕が死んだら、まず保険金が入りてお金が何千万円と入ります。今ある住宅ローンが完済します。ですから、家族はみんな安心して生きていけます。だけど、僕が運悪く生き延びてしまうと、住宅ローンは残ります。家は取り上げられます。保険金も下りません。そして、僕は働けません。何もかも諦めないといけない。

これは、貧しい人たちだけの問題じゃないということなんです。年収1,000万円の人が出て、もう一人1,000万円の人が出て、2人が結婚して2,000万円、超金持ちですね。しかし、僕がそうだったように、簡単に人間は死にかけます。簡単に人間は心の病気になります。大勢の人が鬱病になっています。その瞬間に仕事に行けなくなって、年収は半分。そうすると、2,000万円を前提に払っていた住宅ローンを半分の1,000万円ですら払わなければならない。子供の学費を払わなければならない。できるか？、できない。お金持ちのカップルだって、運さえ悪かったら全てが吹っ飛びます。これが日本社会です。

実は、僕の母が認知症になって、あるとき遠くをぼーっと眺めていたんです。僕はその母を見て、ぞっとしました。僕は母子家庭の生まれで、叔母もいて、その2人分の生活費を毎月毎月、20年以上ずっと払ってきました。今、うちには子供が4人いますが、当時は3人いて、この子供たちの学費がかかる。プラス2人の生活費がかかる。さらには介護施設、福祉施設に入ったら、そこのお金もかかる。とてもじゃないですが、慶應大学の教授ごときの収入じゃ無理なんです。おかしいでしょう、こんな話。笑顔でぼーっと遠くを見る母の表情を見て、ぞっとしました。おふくろ、一体いつまで生きるのかなと思いましたよ。

でも、大切な家族が長生きをすることは、本当は幸せなことじゃないですか。僕が脳内出血で倒れて、仮に障害を持って助かるって、それはいいことじゃないですか。しかし、そうすると、家族が、子供たちが不幸になる社会って、どこかおかしくないですか。この社会を変えなきゃいけない。

## 平成の貧乏物語 — 自己責任社会の土台は崩れ去っている

ところが、今の日本の状況は絶望的なんです。今から平成に起きたことを皆さんにお話ししようと思います。皆さん薄々気づいていると思います。平成の間に日本人は貧乏になりました。今からぞっとするような数字をお見せします。

平成の初めと終わりで、父ちゃん母ちゃんが働きに行く共稼ぎのおうちが6割増えました。その結果、専業主婦世帯のおうちの2倍以上が共稼ぎ世帯になっています。富山は皆さんはもともと共稼ぎだけれども、日本社会全体では専業主婦が圧倒的だった。ところが、今では2倍以上が共稼ぎだから、父さん母さんが働きに行っているおうちが普通のおうちになったんです。

それなのに、勤労者世帯の年収のピークはいつか。1997年、今から24年前です。お父さんお母さんの2人で働きに行くようになったのに、僕たちが一番お金持ちだったのは24年前。いまだに24年前の

収入を僕たちは超えられないんです。

今、世帯収入300万円未満が占める割合が全体の31%、400万円未満が45%という社会になりました。これは平成元（1989）年とほぼ同じ割合です。平成元年から平成9（1997）年ぐらいまでは、みんな豊かになっていたから、この300万、400万円未満の割合がどんどん減っていった。ところが、1998年以降、所得がどんどん減っていくので、この割合がどんどん増えて行って、とうとう平成元年と同じ割合に戻った。

300万円というと、手取りで240万円ぐらいです。これは世帯収入ですから、2人が働いているとするならば、1人120万円、夫婦で240万円、それが全体の3割。あるいは、400万円だったら手取りが340万円ぐらい。170万円の2人が、世帯で340万円、これが全体の5割近く。そうやってしまえば、当然のことながら貯蓄も難しくなる。

2人以上で暮らしている世帯の3割、一人暮らしで過ごしている家庭の世帯の5割が貯蓄なしというのです。思い出してください。老後の備え、子供の学費、病気をしたときの備え、家を買うときのお金、この社会は何でもかんでも貯金じゃないですか。ところが、こんなに貯金ができない人が出てきている。

1人当たりのGDPを見てみますと、平成の初めに日本は世界で4位、僕が大学生のときは世界で2位だった。それが今では世界26位、発展途上国の一步手前です。

これは皆さんご存知でしょう。世界の企業時価総額トップ50社に、平成元年は日本企業が32社入っていました。それが今ではたった1社、トヨタのみです。

資産価値10億ドル以上でまだ株式市場には上場していないユニコーン企業、伸びしろたっぷりのグローバル企業が、アメリカには214あり、中国には107あるのに、日本にはたった7つです。しかも、これはインドにも韓国にも負けている。

貧困率、貧しい人の割合を見てください。先進国の中で9番目に高い。

ジニ係数を見てください。格差の大きさです。所得格差の大きさも11番目に大きい。

私たちがつくってきた日本の経済の現状は、こういうことです。それなのに、働いて、節約してお金をためて、自分自身の責任で生きていきなさいと。さっきの図で見たように、政府は働く人たちの暮らしを支えてくれない。今、こんな状況が生まれてしまっているんです。

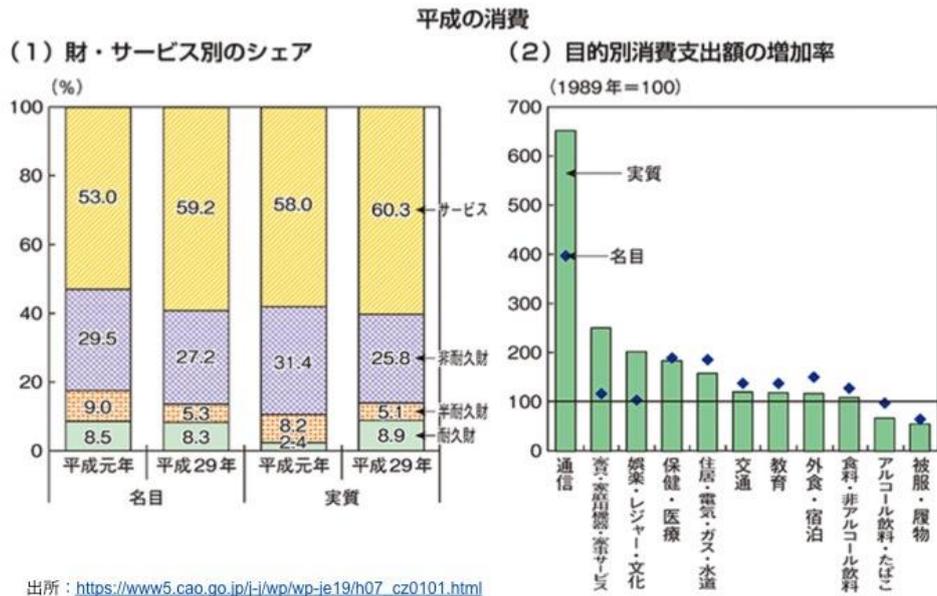
## 中流とこたえる国民意識

内閣府の調査（令和元年国民生活に関する世論調査）で「皆さんの暮らしぶりはいかがですか。上流ですか、中流ですか、下流ですか」と聞きました。「下流」とこたえる人はたったの4.2%しかいない。そして、「中流」とこたえる人が何と92.7%に達しているわけです。すごくないですか。さっき世帯収入300万円未満、手取り240万円と言いました。2人で働いて240万円。この240万円で、子供2、3人産んで、学校に行かせて、家を建てて、老後の金をためてってできますか。無理でしょう。だったら、その人たちは、自分は下流だと言ってもおかしくない。普通、世帯収入200万円台といたら、決して中間層ではないですよ。だったら、31%の人が下流とこたえてもおかしくないんです。貧困率

をご覧ください。16%です。だったら、16%の人が下流と言ってもおかしくないでしょう。

ところが、この社会では、たったの4%の人しか自分が貧乏だということを認めようとしません。何でこんなことになったのか。何でみんな中流だと言い張るのか。僕は不思議でしょうがなかったので、いろんなデータをひっくり返してあれこれ考えました。

## 平成の消費の変化



グラフ「(1) 財・サービス別のシェア」について、右側の実質の値をご覧ください。これは、平成元年と平成29年の間にどんな消費が増えたのかを見えています。一番下にある耐久財と呼ばれるものが3倍以上、4倍弱増えています。ところが、半耐久財あるいは非耐久財と呼ばれる財の消費はものすごく減っています。

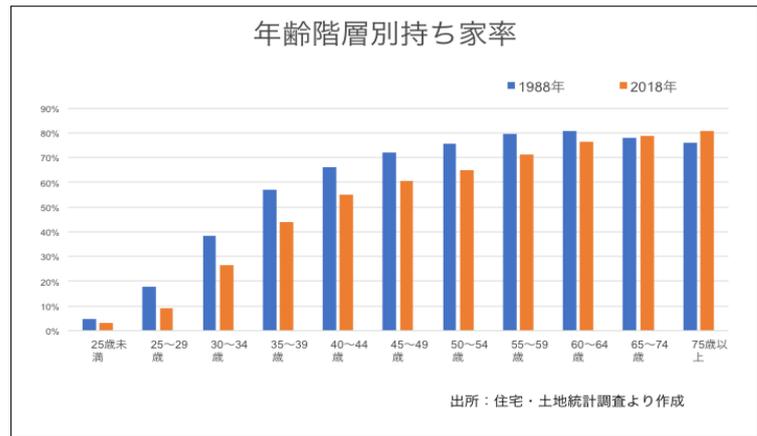
耐久財というのは、例えば家電製品のように、しばらく、10年ぐらい使えるような財です。半耐久財は服とかかばんとか、何年か使えるようなもの。そして、食べ物や飲物のように、すぐに消費されるのが非耐久財と呼ばれます。平成の間に耐久財だけがやたらと増えている。何でか。

グラフ「(2) 目的別消費支出額の増加率」をご覧ください。これも平成元年を100としたときに、平成の間にその消費が何倍ぐらい増えたのかというのを見たものです。服や履物は半分近くに減っています。お酒、たばこなどの嗜好品も3分の2ぐらいに減っています。食べるもの、外食・宿泊、教育、交通、この辺がほぼ横ばいです。ところが、家具・家電製品等と通信だけ、特に通信が異常に増えています。皆さんもうお分かりですか。具体的に中身を見ていくと分かります。

着るものを諦めて、食べるものを諦めて、そしてお酒やたばこも諦めて、子供の教育も…、これは実際は子供の数を減らしているんですけども、子供も諦めて、節約して、そのお金でパソコンやスマホを買って通信費にお金を使っている社会になっているんです。

もう1つ数字をご覧いただきたいと思います。青い線が1988（昭和63）年、昭和の終わりです。そして、赤い線が2018年、平成の終わりですから、平成の間の変化を見たものです。それぞれの年齢層

で見えています、64歳以下の層をご覧いただくと、青よりも赤、つまり1988年から2018年の30年間にがくと数値が減っているのが分かります。これは何かというと、持家比率です。つまり、平成の間に家も持てなくなったということです。



## 自己責任を果たすことができなくなったとき

先ほどの、何でみんな中流とこたえるのかというクエスチョンへの答えを申し上げます。結婚を諦めました。子供を諦めました。食べるものも、外食も諦めました。着るものも諦めました。嗜好品も諦めました。家を持つこと、何もかも全て諦めて、何とかパソコンを買い、スマホを持ち、そして通信費を他の人と同じように私は払えているから、だから中流だという話になっているんです。

おかしい社会ですよ。子供を持たない、結婚できない、家が持てない、好きなものを食べられない、着られない、そんな社会は貧しくなった社会に決まっているじゃないですか。しかし、この社会の人たちはそのことを決して認めようとしません。自分は下流だと認めようとしません。何でこんなことが起きるのか。それは、この社会の深いところで自己責任を果たすこと、自分自身の責任を果たすことへの執着があるからです。

1997年～1998年にかけて、自殺者数が2万4,000人から3万3,000人に、たった1年間で8,000人以上増えました。失業者が50万人増えると、8,000人も死亡者、自殺者が出た。そして、3万人以上を12年間にわたって続けていたということは、皆さんご存知のことだと思います。

1997年～1998年というのは、まさに所得が下がり始めたとき、雇用が不安定化していくとき、貯蓄が難しくなっていくときです。男性労働者は、自分自身が自己責任で生きていくことを誇りに思っていた。自分の腕っ節一本で働いて、家族を養い、子供を学校に行かせ、そして家を立て、老後のお金を蓄えてはじめて一人前の男だと思っていた。

それができなくなったときにどうしたか。死んだんです。なぜならば、自己責任を果たせない、働いてお金をためて、家族を養う責任を果たせない情けない人間だから。人様のご厄介になるぐらいなら死んだ方がましだと言うんだけど、本当に死んだんです、この社会では。そういう社会を私たちはつくってきた。

これが自己責任で生きていける時代ならいいんです。僕はそれを悪いことだとは思わない。しかし、残念ながら経済はもう成長しない、自己責任で生きていけない状況が明らかに生まれている。人々はひたすらに生活の質を落として、何とかインターネットの世界にだけは加わろうとする。だけど、自分は下流だとは絶対に認めない。下流？ 低所得層？ 貧しい人？ それは自助努力の足りない、自己責任を果たしてない人間だろう。自分は違うと思っている。

## 働くことはつらいこと？

ところが、働くことは単純に楽しいことじゃないんです。皆さんの会社は分かりません。労働者の雇用環境はすばらしいかもしれません。ただ、平均的な日本人がどう感じているか、ちょっと見てほしいと思います。

これはISSPという国際調査です。「私の仕事は失業の心配がない」という質問に対して、賛成した日本人の割合は41カ国中40位です。「私の仕事は収入が多い」という質問に賛成した日本人の割合は、41カ国中36位。「私の仕事は面白い」という質問に対して賛成した日本人の割合は41カ国中39位。「家の用事、個人的理由で1、2時間は仕事を離れられる」という質問に賛成した日本人の割合は39位。そして、「ストレスを感じる」という質問に賛成した日本人の割合は3位です。

失業の心配があり、収入は不十分で仕事は面白くない。家族が病気をしても仕事は離れられないし、ストレスでいっぱい。悲しいけれども、国際的に見ると、日本人の働いている環境というのはこういう状況にあります。

僕が皆さんにお伺いしたいのは、まさにこの点なんです。仕事は決して楽じゃないんです。しかも、東京なんかだと、通勤ラッシュがあるから、そもそも職場に行くのに死ぬほどつらいわけです。それでもこの社会の人たちは、みんなが必死になって働いています。なのに、子供も産めない、着たいもの、食べたいものも手に入れない、家も持てない、そういう社会になっているわけです。

そして、その人たちは、自分は下流じゃない、何とか中流で踏ん張っているんだと信じたい人たちです。その人たちに対して「困っている人を助けてあげましょう、格差を是正しましょう、反貧困だ」などと言ったらどうなりますか。「冗談じゃないよ、俺たちだってしんどいけど頑張ってるじゃん。自助努力だろう、自己責任だろう。生活保護なんでもらっているやつは、本当は働けるんだ、働かせろ」という、貧しい人たちへの冷たい声が聞こえてくると思いませんか。

## 優しさをなくした社会

今の僕の話は、決して臆測ではありません。数字を見ればそのことがすぐに分かります。さっき、日本の格差は先進国の中で11番目に大きいことを見ましたが、「日本の格差は大きいですか」と聞くと、「うん、大きいね」と賛成する人の割合は非常に低いです。あるいは、「所得の格差を縮めるのは政府の責任だ」と質問したときに、「そうだそうだ、政府の責任だ。格差をもっと小さくしろ」と言う人の割合も非常に少ない。42カ国中36位です。「失業者の暮らしを守るのも

### 働くことはつらいこと？

- 労働が苦痛であるということ (ISSP: 41カ国中順位)
  - 「私の仕事は失業の心配がない」 40位
  - 「私の仕事は収入が多い」 36位
  - 「私の仕事はおもしろい」 39位
  - 「家の用事、個人的理由で1、2時間仕事を離れられる」 39位
  - 「ストレスを感じる」 3位

→ 苦痛に満ちた労働環境で他者に優しくいられるか？

### 優しさをなくした社会

- 社会的弱者への無関心
    - 日本の格差は大きすぎる: 28位/42カ国
    - 所得の格差を縮めるのは政府の責任: 36位/42カ国
    - 失業者のそれなりの生活を維持せよ: 28位/42カ国
    - 給付で所得格差を小さくする力: 19位/21カ国
    - 課税で所得格差を小さくする力: 21位/21カ国
- (内閣府、ISSP、OECD、WVS)

→ 「格差是正」が政策的な論争点にならないなか、どうやって人びとの命と暮らしを支えていくのか？

政府の責任でしょう」と聞いても、それにも賛成しません。

それどころか、財政を見てください。格差を小さくするのは簡単です。貧しい人にどんどんお金をあげて給付していけば格差は小さくなります。反対に、お金持ちにどんどん税金をかけて、お金持ちからお金を取り上げれば格差は小さくなります。簡単な話です。ところが、貧しい人にお金をあげて格差を小さくする力は、21の先進国の中でビリから3番目。そして、お金持ちに税金をかけて格差を小さくする力に至っては、ビリなんです。

皆さんは、この数字をご覧になってどう感じられますか。僕は腹が立ちます。何でこんな恥ずかしい国になったのかと思います。困っている人を助けることに、説明が必要なんですか。困っている人を助けるのは当たり前のことなんじゃないですか。この社会を生きる人たちが、我々日本人は仲間だ、我々富山県民は仲間だ、この仲間が困っているんだから困っている仲間を助けようじゃないか。僕はそれが真っ当な、普通の社会の姿だと思う。でも、もし日本社会がそんな社会になっているなら、こんなにみっともない財政はつくらないですよ。こんなのはおかしい。

もし、右翼の人がいるんだったら、僕はその人に言いたいと思う。あなたの同胞が、あなたの仲間がこんなに苦しんでいるんだ、何で見て見ぬふりをするんだと。左翼の人にも言いたいですよ。金持ちが憎い、貧乏人を助けてやれ。冗談じゃない。この国の人たちはたった4%しか自分が貧乏人だと思っていない。たった4%の人が喜ぶようなことを言って、現実の政治で、現実の選挙で勝てるのか。みんなずれている。だから、そうではない、新しい政策を考えないとこの社会はとんでもないことになる、僕はそう思うわけです。

## コロナが教えてくれたこと

コロナの感染者数がコントロールされていて、おまけに死亡者数もコントロールされていて、その限りにおいて日本政府の政策はうまくいっていると思います。3密をいち早く特定し、この3密をなくすこと、3密を避けることが重要なポイントだ、マスクをすることはとても大切なことだ、これをいち早く発見し、それを国民に徹底させた政府は大したものだと思います。

でも、それとは全く別の深刻な問題がたくさんありました。最初は貧しい世帯に30万円を配ると言っていたんです。ところが、一斉に国民はそれに反発した。そして、貧しいやつらの取り分はいいから俺たちにもよこせと言うわけです。全員に10万円配る。貧しい人たちの取り分が減っているじゃないですか。僕はおかしいと思いました。

ちょうどうちの庭の工事やっていて、その工事の費用が60万円だったんですけども、うちは子供が4人いるものですから、税金で庭の工事をやっているみたい。ばかじゃないかと思いました。でも、そんなことが行われてしまうわけです。

今頃になって貧しい世帯にお金を配ろうなんて言い始めていますが、遅いでしょう。でも、もう皆さんなら分かる。この社会は成長に依存し、自己責任で生きていかなければいけない社会だ。コロナでみんなが不安になっている。だから、人のことはいいから自分に金をよこせというのは、今までのデータを見れば分かるでしょう。

あるいは、感染予防なのか経済なのか、これがよく分からないままダッチロールを続けている。去

年だって皆さんはお感じになられたでしょう。一方では緊急事態宣言、自粛しろと言いながら、他方ではGo Toキャンペーンだと。こっちでは出ていけ、こっちでは引っ込めと、説明がつかない。それは感染予防と経済のはざままで揺れている。

では、何でこんなに揺れるのか。それは、この社会は、所得が減って貯金ができなくなった瞬間に絶望しなければいけない社会だから。感染予防を徹底できないから、中途半端になってしまう。あるいは、失業・倒産、収入が減れば、将来の生活不安が直撃する。だから、この社会にコロナを蔓延させるわけにはいかない。経済が倒れたら自分が死ぬ。だから、人々は必死になって自粛する。それはそうでしょう、そういう社会ですから。

でも、それはまだいいんです。僕が腹が立つのは、社会的な制裁が至るところで繰り広げられることです。大体の話が、この社会には営業の自由や移動の自由はないのでしょうか。営業の自由や移動の自由があるんだったら、そもそもの話、営業を自粛しろ、移動を自粛しろと言うなら、所得補償をやるのが当たり前でしょう。休業補償も存分に出さずに、公共の福祉に反するとか何とか言って自粛しなさいなどと言うのは、人々の権利を全く考えていない暴論だと僕は思う。

しかし、そんな言説が普通にまかり通って、パチンコ屋さんが営業していると、社会的にたたたく。そこにパチプロが並んでいると、そのパチプロをたたたく。しかし、パチプロが尊敬できない職業であったとしても、そこで食っている人に収入がなくなるというのだったら、何とかしてあげないといけないはずじゃないですか。しかし、そんな議論はみじんも起きない。自助努力や自己責任を必死になって果たしている人たち、しんどいのになら我慢して歯を食いしばって頑張っている人たちからすると、言うことを聞かない人間が腹が立ってしょうがない。だからたたたく。

軽んじられる民主主義もあります。話すと長くなってしまうので1つだけ。最初に小学校と中学校を閉鎖しましたね。大分報道されましたけれども、あれは官邸のある人の進言で首相が独断で決定したと、これはメディアの報ずるところです。たった2人で小中学校を閉鎖した国なんてないですよ。現実にそういうことが起きている。民主主義はどこに行ったんだと思う。子供たちの学ぶ権利、学習する権利という話が出てこない。感染予防のために、たった2人で決めたことを国民がみんな忠実に聞く。営業の自由は？ 移動の自由は？ 学ぶ自由は？ どうなるんでしょうかね、この社会は。

おまえ、ちょっと厳し過ぎだよと聞いていらっしゃるかもしれませんが、僕はコロナの間に、本当にこれでいいのかと自分が病気になるんじゃないかと思うぐらい悩みました。

しかし、希望はあります。世界価値観調査 (World Values Survey) の中で、「国民みな (自分も含めた全ての人たち) が、安心して暮らせるように国は責任を持つべき」という質問に対して、8割近い日本人が賛成しているんです。答えは明白です。困っている人を助けようというのじゃない。自分も含めた全ての人たちが幸せになるような社会をつくってほしい、これが国民の声ではないのかということです。だから、一律10万円給付だって、データによっては7割、8割の国民がすばらしいと評価するわけです。

## Ⅱ ベーシックサービスの提唱

僕は、今皆さんに申し上げたような危機感があって「ベーシックサービス」という考え方を提案しました。このベーシックサービスという考え方は、決して突飛なものではありません。1976年にILOが提唱した「ベーシックニーズ」という考え方を基にしています。

それは何かというと、人間生活にとって最低限かつ基本的に必要なものをベーシックニーズとしよう。具体的には、衣食住、水、衛生、健康、教育、雇用及び社会参加、これをベーシックニ

ーズと定義しようではないかという議論がILOにありました。でも、これはみんなに配ろうという提案ではありません。現実には、アフリカの難民や子供たちのように、衣食住あるいは健康が十分に確保されていない人たちのために、ちゃんと出していこうねという提案だったんです。

僕のベーシックサービスは、これとはちょっと違います。なぜならば、僕が今から提案するのは、全ての人たちが、病院はただになる、介護はただになる、大学はただになる。幼稚園、保育園はもうただになりました。そういう社会を目指そうというのがベーシックサービスなんです。

もう1つ、ベーシックニーズとの重要な違いがあります。それは何か。服や食べるもの、休む場所、これはモノですね。モノは提供しません。財のモノと、サービスを分けましょう。そして、サービスを提供するのがベーシックサービスの考え方です。なぜならば、全国民に家をあげよう、全国民に服をあげよう、全国民にパンをあげようとやったら、こんなのは社会主義じゃないですか。こんな話はない。ですから、医療や教育や介護や、全ての人たちが必要とするサービスに限定して、全ての国民に提供していこうじゃないかというのが僕のアイデアです。

では、おうちはどうするの？ 家はベーシックサービスではないのか？ 残念ながら、全国民に家を提供することはできません。したがって、一部は公営住宅のような形で貧しい人に。そして、後で話しますが、家賃補助を整えることによって、貧しい人たちには生活保護や家賃補助を通じて、貧しい人たちにだけ住宅や、あるいは光熱費や生活費を保障していく、これはまた後で説明します。

まずは、サービスとお金をきちんと分ける、サービスとモノを分ける、この点をご理解いただきたい。そうすると、ベーシックと言っているけれども、ベーシックって何なのかと必ず言われます。これは理屈では決められません。それぞれの政党が、これがベーシックだということを議論する、ここに意味があります。

大学をただにしよう僕は言いました。でも、今いらっしゃる人の中には、いや、大学なんかとんでもない、そんなことをやったら勉強する気がないやつがどんどん大学に行くじゃないかと反対する

### 人類の願いを 時代にあわせて、進化させる

- 1976年ILO提唱「ベーシックニーズ」
  - 人間生活にとって最低限かつ基本的に必要なもの
  - 衣食住・水・衛生・健康・教育、雇用および社会参加
- ベーシックニーズを洗練した「ベーシックサービス」
  - 人口減少+経済の長期停滞→広すぎるベーシックニーズの守備範囲
  - 「財」と「サービス」を分ける（=財の直接給付は社会主義に接近）
  - 「財（衣・食・住）」にかかわる部分は手厚い現金給付で対応
  - 命や暮らしに直結するサービス（教育・医療・介護・障がい者福祉）はすべての人たちに無償化
  - 「何がベーシックか？」に各政党の理念があらわれる

人がいると思います。何がベーシックかということは、各政党がその中で議論して決めるべきことです。自民党と公明党と野党と、全然違ってくるでしょうね。それでいいんです。その政党がベーシックだと考えたサービスを、全ての人々に提供していくというところにポイントがあります。

さらに、もう一つ重要なポイント。僕がベーシックサービスと皆さんに申し上げたときに、「インカムとは何が違うのか。お金をみんなに配れば、病院に行けるし、大学に行けるし、それでいいんじゃないの」と思った方はいらっしゃいませんか。「ベーシックインカム」とは、全国民にお金を配ること。僕は、この考え方には賛成しません。お金をみんなに配るのではなくて、サービスをみんなにあげるのが僕のアイデアです。なぜか。はるかに安上がりだからです。

## モノでも金でもない、サービスを配る強み

一番分かりやすい例で、去年、特別定額給付金、1人10万円を配りましたね。一体いくらお金がかかったでしょうか。1億2,000万人いますから、13兆円かかっています。13兆と言われてもぴんときないですよ。13兆というのはこういう額です。

先ほど、安倍首相（当時）が「幼稚園、保育園の無償化。占領期以来、70年ぶりの大改革だ」とおっしゃったと言いました。占領期以来の70年ぶりの大改革ですよ。全ての世帯の子供たちが、何のお金の心配もせずに幼稚園や保育園に行ける社会に変わりました。この大改革にかかったお金はいくらかということ、たったの9,000億円です。ですから、1人10万円配ることによって、この歴史的な大改革の14年、15年分のお金がたった1年で吹っ飛んだんです。

これは消費税でいうならば、大体5%分ぐらいの金額になります。何でこんなことになるか分かりますか。サービスは、要る人しか使わないからです。幼稚園、保育園がただになりました。この中で幼稚園、保育園に入り直した人はいますか。いるわけないですね。なぜならば、要らないから。病気がなかったら病院に行かないじゃないですか。大学を卒業していたら、普通は入り直さないじゃないですか。要らない人は使いません。だけど、ベーシックインカムは全ての人にお金を出さなければいけないので、べらぼうなお金がかかってしまうわけです。

もし、僕のベーシックサービスの考え方を皆さんご理解いただいたとして、13兆円のお金があったら、僕は全然違う政策をつくります。13兆円もの金があったら、もっともっとすごいことができます。

例えば、今回、貧しい人にも1人10万円しかあげませんでした。1年間でたった10万円ですよ。だけど、もし住宅手当を創設する…。実は、住宅手当、家賃補助の制度がないのは先進国の中で日本だけです。これをつくりましょう。毎月2万円、年間24万円を配りましょう。もうこの時点で定額給付金の倍です。それを例えば全体の2割、貧しい2割、1,200万世帯に配ってみましょう。今、失業者が200万人を切るぐらいでしょうか。これが、リーマンショックのときのピーク時の350万人まで増えたとしましょう。今からさらに150万人、失業者が増えたとする。その失業者に毎月5万円、年間60万円の給付をしようじゃないですか。1人10万円とは桁違いの、貧しい人たちは何倍ものお金がもらえるようになります。

それだけではありません。大学をただにしましょう、介護をただにしましょう、障害者の受けている福祉もただにしましょう、病院に行ったときの自己負担、今の3割を2割、正確に言うならば1割

5分、半額にしましょう。これを全部やって、同じ13兆円ですよ。皆さん、どっちがいいですか。考えてください。

この13兆円というのは、消費税5%分とほぼ同じだと申し上げました。今度は、仮に消費税を5%減税してみましようか。これは今、左派野党、国民民主党、共産党が言っています。やってみましようか。何が起きるか。2割の貧しい世帯に1年間で8万円のお金が返ります。こんなのはすぐ計算できます。消費税を5%下げれば8万円返ります。8万円というのはどういうことか。

今、1人の子供の教育費、大学の学費は平均400万円です。ということは、5%の減税を50年間続けたら、大学の授業料1人分になるということです。また、一律10万円給付にすると、教育費400万円は、40年間お金をこつこつためて、やっと1人分の学費がたまるということです。その政策と、同じ13兆円で、一発で大学がただになる政策と、どっちがいいですか。困っている人たちが安心して生きていける社会になるケースと、どっちがいいですか。

今から話しますが、皆さんがもし消費税を0.8%上げていいよとおっしゃったら、その瞬間に全国民が、大学はただになります。だけど、その1人分の学費を消費税5%減税でためようと思ったら50年かかるんです。3人いたら150年かかる。どっちがいいですか。

現金を配るといのは、それだけ高くつく。だから僕は言うんです。実現困難な大改革ではなくて、実現可能な大改革をやりませんか。これが「ベーシックサービス」ですよと、申し上げるわけです。

## 貯蓄ゼロでも不安ゼロ

答えを言ってしまうですね。これは消費税じゃなくていいんです。ただ、皆さんに分かりやすいように消費税で言います。今の10%から16%まで、あと6%上げましよう。そうすると、大学はただになります。病院もただになります。介護もただになります。障害者の福祉もただになります。それだけではありません。介護で働く人たちの給料が安いことが大問題になって、10年以上働いている人の給料はかなり上がりました。月額9万円ぐらい上がったんじゃないかな。でも、10年未満の労働者だって同じように上げてあげましようよ。待機児童問題が今全国で問題になっている。だったら、保育園や幼稚園で働く人たちの給料も同じように上げるべきじゃないですか。

先ほど、住宅手当がこの国にはないと申し上げました。だから住宅手当もつくりましよう。そして、小学校、中学校、学校の給食費にお金がかかる、学用品費にお金がかかる、修学旅行、遠足、見学にお金がかかる。貧しい家庭の子供たちがこれでどれだけつらい思いをしているか。これも全部無償化ましよう。

これを全てやって、消費税で言うならば6%分。皆さん大增税だと思うでしょう。しかし、消費税をもし16%まで上げたとしても、先進国の平均的な負担率よりも安いんです。この国は驚くほど税金が安いんです。皆さんは多分高いと思っている。それは、もらえないから高いと思っているんです。だから、ここまでやって、代わりにしっかりもらえるようにする。他の国と同じ程度の租税負担率にしてよければ、皆さんが何人お子さんをつくっても、あるいは何歳まで生きても、心の病を抱えて働けなくなっても、失業しても、安心して生きていける社会がつかれます。これが僕からの提案です。

ずっとこの提案をやっていて、まさに安倍さんが首相だったときに、消費税を増税して、幼稚園、

保育園、低所得層の大学の無償化もおやりになった。しかし、僕が提案したのはそれだけではなかった。介護、医療、いろいろなものを無償化に近づけていこうと。来年いきなり、えいやというのは無理かもしれない。だけど、病院に行って3割負担を2割に、2割を1割に、お年寄りの介護の負担をなくそう、大学の学費を半分にしよう、そのためにはこれだけのお金が要るから、そのお金はきちんと税金で払おうと。

考えてください。スーパーに行ってジュースを1本買う。この100円のジュースが今110円になっている。これが116円になるという話です。その代わりに、学費の心配もしなくていい、老後の心配もしなくていい、大きな病気をしても大丈夫。そういう社会はつくれるじゃないか、それが僕から皆さんへの提案なんです。

## 僕の原体験

数字をたくさん並べて、でっかい声を張り上げて話をしてきましたけれども、ちょっと脇道にそれて、何で僕がこんなことを考えるようになったのかを少しだけお話させていただきたいなと思います。

僕は、福岡県の久留米市で生まれました。おふくろが40歳のときの子供で、母子家庭です。おふくろが僕を身籠もっているときに、親友が「あんた、子供おろさんと無理よ」って泣いて説得したそうです。「あんた、40過ぎて、母子家庭で子供を育てて、子供が障害を持つとったらどげんすつとね。生活保護もらわんと、あんたやっていけんやろうが」って言って泣きながら止めたそうです。

そのときに、母の妹、僕の叔母なんですけれども、叔母が母にこう言ったそうです。「姉ちゃん、産んでやらんねえ。うちはぼろ着てもよか。結婚もせんでよか。姉ちゃんの産んだ子ば育てたい」って言って泣きながら頼んだそうです。「うちは貧乏やけん、子供、偉くはしきらんよ。ぼってん、姉ちゃんとうちが一生懸命育てれば、立派な大人になるけん。その子が立派に育ったならば誰も姉ちゃんのことを笑わんよ。産んでやって」って言って泣いたそうです。僕が大学生のときに、おふくろが目には涙を浮かべながらそういう話をしてくれたことを思い出します。

うちは、はっきり言ってすごく貧乏でした。この間、久々に僕が生まれたうちを見に行ったんですけども、本当に驚くぐらい狭くて小さくてぼろい、長屋の一步手前みたいなところでした。貧乏でしたし、水洗便所に初めて入ったのが小学校4年生ぐらいでした。おふくろはシングルマザーでしょう。叔母がずっと働いてお金をうちに入れてくれたんです。だから働く女性もいた。伯父、母の兄貴もいました。戦争中、勤労奉仕で機械に手を巻き込まれてしまって、右手がなかった。それで国と会社から年金をもらっていて、それをうちにちょこちょこお金を入れてくれていました。

僕が育った環境というのは、貧乏だったし、シングルマザーもいたし、働く女性もいたし、障害者もいました。だけど、みんながたった1つ、英策の健やかな成長だけを願って支え合って生きていました。

家族にはいろんな家族があります。家族をべた褒めする気はありません。ただ、僕は、僕の育った家族は最高だったと思っている。だから、僕は僕の家族のような社会をつくりたいと思っている。貧乏でもいいじゃないですか。障害があってもいいじゃないですか。シングルマザーでもいいじゃないですか。働く女性でもいいじゃないですか。しんどいかもしれないけれども、みんなが次の世代の子

供たちの健やかな育ちだけを願いながら、支え合って、助け合って生きていくような社会が僕はいい社会だと思います。

僕が小学校3年生のときに、初めて生活保護という仕組みを知りました。僕は伯父のことも叔母のことも知らなくて、いつもおふくろはうちにおるのに、なぜか生活費はあるわけです。子供のときから不思議でしょうがなかったんです。あるとき、生活保護の仕組みを知って「これだ」と思いました。大発見した気分になりました。これをもらっているから、うちは生活できるんだと本気で思ったんです。学校から帰って、玄関を開けて、ランドセルをぼんと投げて、「お母さん、うち、生活保護もらいよるけん、お金あるっちゃろ」とでっかい声で言いました。そしたら母親が、もうまさに文字どおり血相を変えて飛び出してきて、しかも玄関の扉をさらに開けて、でっかい声で言いました。「そげんか恥ずかし金、うちは一銭ももろうとらん。そげんかこつ言うて恥かくとはあんたやろうが。絶対人前でそげんかこつ言いなさんな」ってものすごいけんまくで怒られて、わんわん泣きました。

でも、後になって気づくんです。あれは絶対に近所の人に聞こえるように言っていたんです。今思えば、生活保護は権利なんだから、貧乏だったら、働けなかったら堂々と使っているんです。例えばスウェーデンだったら、生活保護を使っていい貧しい人の8割が使うんです。フランスだったら9割の人が使うんです。だって権利だから。ところが、日本では15%の人しか使わないんです。この国では人様のご厄介になることは恥なんです。だから母親の暴言「そげんか恥ずかし金、一銭ももろうとらん」というのは、おそらく日本人のかなりの多くの人たちが感じる正直な思いなのではないかと僕は思う。この言葉がずっと僕には、こびりついていました。

そして、僕が大学に行って、大して勉強できたわけでもないのに、無謀にも大学院に行って学者になりたいと思った。ところが、僕は私立の高校に行って、大学は東京に行って、しかもおまけに大学院に行くなんて言っているけれども、もうその頃、おふくろも叔母も借金で火だるまになっていました。母親が、僕が小学校4年生のときからスナックを始めたんです。だから、僕は毎晩スナックのカウンターで勉強していました。そのスナックがバブルがはじけて傾いて、借金まみれになって、家賃は払ってもらえない、仕送りは届かない。生きるのも大変な大学生活を送っていたんです。だけど、僕は勉強したい。悩みに悩んで、おふくろに電話したんです。「お母さん、大学院に行ってよかね。ごめんね、うち貧乏やけど行ってよかね」と言いました。そうしたら、母は10秒ぐらい沈黙しました。今思うと、お願いやけん、働いてうちに仕送りしてって言葉が、もうここまで出かかっておったと思います。だけど、10秒ぐらい黙って、おふくろは僕に「あんたの人生やけん、あんたのよかごつせんね」と言いました。

結局そう言いながら、僕が大学院に進学すると、ヤミ金融だけで14件、サラ金からは1,000万円、ものすごい借金をした。僕は大学院時代、全く記憶がありません。ひたすらに朝から晩まで働いて家に仕送りをして、そして夜は酒を浴びるように飲んで寝るということをずっと続けていました。

だけど、何にもつらいとは思わなかった。ずっと母親がそばにいて、ずっと母親が僕のことを考えてつくった借金です。僕を大学、大学院に行かせるために。だから、母の借金、叔母の借金は僕の借金だと100%信じて疑わなかった。働いて返しました。全部返しました。そして、大学の教員になることができて、こんなに幸せな人生を送っている。

だけど、気づいていることがあります。僕はおふくろが産んでくれなかったら、そこで終わっていた人生です。借金まみれのときに、反社会的勢力の人たちと大げんかになって、そのまま拉致されたことがあります。これが死にかけた2回目です。そして、3回目は2011年、急性硬膜下血腫で、脳内出血で死にかけました。3回死にかけた僕が今ここに立って話をしています。なぜか。運がいいからです。たったそれだけの理由です。たったそれだけの理由で、こんなにすばらしい人たちの前でこんなに熱弁を振るって、こんなに幸せな思いをできている。運がいいという、たったそれだけの理由です。

## 全ての仲間たちが幸せに。痛みと喜びを分かち合う、誇り高き国へ

生まれたときに貧乏だったという理由だけで、将来を諦めなきゃいけない子供たちが今たくさんあふれています。生まれたときに障害を持っているという理由だけで、何もかも諦めなきゃいけない子供たちがたくさんいるんです。女性の中で、子供を産むことを理由に仕事を諦めた女性もたくさんいます。慶應の学生150人に「田舎から来た子、手を挙げて」と言ったら、ものの2、3人しか手を挙げません。

皆さん、考えてほしいんです。生まれたときに貧乏だった、生まれたときに女性だった、田舎で生まれた、障害を持っていた。どれ1つとって子供たちは自分で選んでいないんです。運が悪かっただけなんです。それだけの理由で一生を諦めなきゃいけない、こんなばかな話がありますか。

僕はたった1つ、運がよかったというだけで生き延びて、こうやって皆さんにお話をさせてもらえる。一方では、運が悪かったという、たったそれだけの理由で全てを諦めなければいけない子供たちがたくさんいる。こんな社会をつくり、こんな社会を残していく大人たちは、一体どう責任を取るんだと思うわけです。

人々に恥ずかしい思いをさせたくない。この世の中には落とし穴がたくさんあります。運が悪いというたったそれだけの理由で、その落とし穴にすこーんと落ちます。そうしたら、みんなが見て、ああ、かわいそうに、助けてあげようねと救いの手を差し伸べようとする。しかし、大勢の人はその穴に落ちているのに、歯を食いしばって耐えようとする、この社会の人たちは人に頼らずに生きていこうとするんです。

だったら、この落とし穴をなくすべきじゃないですか。運が悪いなどという、たったそれだけの理由で悲しい目に遭う人をつくらない、弱者を助けるのではなく、弱者を生まない政治こそが求められているんじゃないですか。

だから、どんな家庭に生まれても、人様から助けてもらわない、人様のご厄介になるんじゃない、堂々と学校に行ける社会をつくる、堂々と病院に行ける社会をつくる、年を取っても介護サービスを堂々と使える社会をつくる、僕はそれが先に生まれてきた人間の責任だと思っている。井手さん、もうそれは学問じゃないねと言われるかもしれないけれども、僕の幼い頃の原体験によってつくられた思想がベーシックサービスの思想なんです。

左側の人からたたかれます。めっちゃめっちゃに言われます。なぜかという、左派の人は消費税が大嫌いだから。消費税を語った瞬間に悪魔のように言われます。皆さん、お気づきでしょう。さっきコ

ロナの施策について僕は不満をば一と言った。実際、僕はいろんなところで書く。そうすると、今度は右の人や保守的な人から、あいつは左翼だと怒られる。右からは左翼と言われ、左からは売国奴と言われ、本当に生きているだけで大変な人生ですよ。しかし、それでも言わなきゃいけないことはあるんです。

今10%払っている暮らしの会費を16%にしよう、そのことによってみんなが安心して生きていける社会をつくれる。左の人が僕を怒る。「消費税？ 貧しい人の負担が大きいじゃないか」と。住宅手当をつくと、この給付だけで消費税の負担よりはるかに大きいお金をもらえます。何がいけないんですか。大学生のときの僕に、あのときの母親に聞いてください。消費税1%上がるけど、大学ただになるよ。どう？と。泣いて喜びますよ。これが貧しい人たちの本当の気持ちじゃないですか。取るべきものを取って、責任ある議論をせずに、そして消費税反対、貧しい人のために闘うぞなんて言っていて、そうすることで、現実に貧しい人たちを置き去りにするようなことをいつまで続けるんでしょうか。絶対におかしい。

僕は言い続けます。税金取ろう、しっかり使おう、みんなが安心して生きていける世の中をつくらう。貧しい人だけじゃない。中間層だって、お金持ちだって、運さえ悪かったら絶望に陥るこの社会にあって、みんなが幸せになれる社会をつくらう。金ごときで人間の扱いを区別してたまるか、貧乏人だから助けてやるなどという社会を終わらせてやる、僕は絶対にそう思っています。

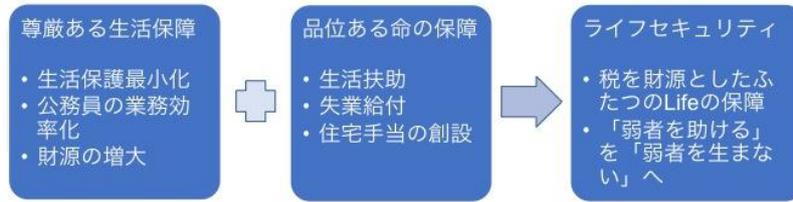
税金というのは、痛みの分かち合いです。みんな痛みを分かち合いながら、この社会、この国を生きる全ての仲間たちが幸せになる方法を考える、その貴重な手段が税金だと僕は思っています。痛みを分かち合い、喜びを分かち合う、そういう誇り高き国をつくり、子供たちに残していきたい。これが残された人生で僕がやらなければいけない大きな課題だと思っております。

### Ⅲ ライフセキュリティへ

ここに書いていることは、全て申し上げたことなのですが、1つだけ追加でお話をしたいのは、僕を目指す社会は、例えば病院がただになったとすると、貧しい人がもらう生活保護の半分が一瞬でなくなります。なぜならば、生活保護のうちの5割弱は、医療扶助と言って、貧しい人たちが病院に行くときのお金なんです。教育が無償化されれば教育扶助も要らなくなる。介護が無償化されれば介護扶助も要らなくなります。最後に残るのは、生活扶助と呼ばれるものだけです。つまり、生活保護を可能な限り少なく、小さくしていく。救済される人、助けられる人を最少にしていくというのが僕の願いです。

そして、生活保護が要らなくなるのでお金が浮きます。おまけに、全員に配りますから、今まで所得審査、年収何百万円以下かどうかをチェックしていた人たちが要らなくなります。公務員、行政はぐんと効率化します。もっと重要なポジションに人員を配置できるようになる。しかも、2兆円~3兆円のお金が浮きます。そのお金をしっかり使って、どうしても働けない人たちの、飲食や光熱費に

# ライフセキュリティへ



- 女性・子ども・障がい者・労働者の前にある人間の命と暮らし
- 運・不運で一生が決まる「選択不能社会」を終わらせる
- 税を「取られるもの」から「痛みの分かち合い」「喜びの分かち合いの会費」に

係る生活扶助をしっかり保障し、失業した人たちの給付もしっかり保障し、住宅手当もつくってあげばいいじゃないかと。

一方では、全ての人々が安心して生きていける社会をつくる。そしてもう一方では、どうしても働けない人たちがいたときに、この仲間の命を心底大事にしていく。これを車の両輪にして、生活と生存、「生」、2つともライフですね、このライフを徹底的に保障していく「ライフセキュリティ」の社会をつくるべきだと僕は考えます。

もう一言だけ付け加えれば、ベーシックサービスの社会は経済を回していきます。なぜならば、今人々は貯蓄のために消費を控えていますから。しかも、この貯蓄は厄介なんです。皆さん、自分が何歳まで生きるか分かっていますか？ 分からない。だから90歳、100歳まで生きていいように金をためる。子供が何人生まれるか、どんな大学に進むか、僕だって分かりませんでした。まず、子供が4人というのが分からなかった。今、長男が中学ですが、とうとう困ったことに私立の中学に行きやがったので、私立の中学、高校。大学は国立かな私立かな、理系かな文系かな、医学部に行ったらどうしようかな、マックスで金をためておかないと困るな。長男にこれだけためるんだったら、残り3人も同じようにためなきゃいけないなど、莫大な無駄な貯蓄をしているんです。

皆さん、考えてください。大学がただになると、子供4人だと1人400万円で1,600万円、僕はこの1,600万円は速攻で使います。皆さんだってそうでしょう。子供の学費の心配をしなくてよくなったら、貯金なんかしないでお金を使うでしょう。違いますか。景気がよくなるに決まっているじゃないですか。病院をただにして、みんなが行くようになって、医者が足りない、薬が足りない、看護師が足りないとなると、賃金上がる、薬の値段が上がる、こうやって経済は循環していきませんか。みんなが銀行に塩漬けにしているお金を税金として取る代わりに、これを毎年度毎年度使っていくから、潜在的な成長率が上がっていく。

日本よりも税金の高いヨーロッパの方が、どの国を見ても成長率が高い。なぜか。政府が無理やりお金を引っ張り出して使っているからです。そういう新しい循環に変えていくべきだと僕は思います。

## 悲惨がありふれる社会を子どもたちに残してはいけない

最後に、びっくりするような写真でお話を終わるご無礼をお許してください。

火事の現場です。これは何かといいますと、僕の実家です。今から2年前の5月21日、母の火の不始末で火事を起こしてしまっ、僕の母と叔母が死にました。そのときの現場です。

僕は親孝行な子供だと思っていたんです。さっき言ったように、親の借金を働いて全部返して、本当に命がけで返しました。東大に行って、浪人もせず、そして教授になるときにも最短距離、全く遠回りをせずに慶應の教授になって、こんな親孝行の息子はいないと思っていた。

おやじの違う姉がいます。子供はいません。その姉夫婦がお金をためて新築の家を建てて、そこに母と叔母を引き取ってくれたんです。こんな親孝行な子供たちはいないと、ついこの間まで僕らは思っていた。ところが、姉夫婦が働きに行っているその間に、母と叔母が火の不始末を起こして死んでしまったんです。姉はもう60歳を過ぎていますので、働く必要はないんです。義兄も正規ですが薄給です。しかし、2人は老後が不安だったんです。子供もいませんし、老後のことが心配でお金をためようと思って、定年後も働きに出たわけです。もし2人が家にいてくれたら、母と叔母をおそらく命がけで助けたと僕は思います。だけど、2人は家にいなかった。なぜか。老後が不安だからです。

僕が今日申し上げたようなベーシックサービスの社会をつくれて、老後は全く医療費の心配をしなくていいよ、介護の心配もしなくていいよ、障害を持ったって大丈夫よという社会をつくることであれば、姉夫婦は絶対に働きに行かなかったと思います。結局、幼稚園と保育園は無償化したわけですけども、介護や医療を無償化するということまで引っ張るだけの言葉の力が僕にはなかった。そのことが、死なせたことにつながったと思っています。痛恨の極みです。

皆さん、どうかこの悲惨がまれに見る悲しい出来事だと思わないでください。このような悲惨な光景は、これから日本社会の至るところに広がっていきます。悲惨がありふれる社会になっていきます。そんなことを見過ごすことは僕には絶対できません。

認知症だった母が遠くをぼーっと見つめた、あのときの笑顔を僕は悪魔の笑顔だと皆さんに申し上げた。ところが、母が亡くなって思い起こすと、全く邪気のない、かわいらしい天使のような笑顔なんです。死んでしまっ、金の心配がなくなっただけで、同じ笑顔が、愛する人間の笑顔が、悪魔の笑顔から天使の笑顔に変わるんです。こんな社会、絶対におかしいですよ。

僕がどんなに長生きしても子供たちが幸せに喜べる社会を、皆さんが何歳まで生きても、子供たちがもっと長生きしてねって言うてくれる社会をつくらないと駄目ですよ。税金にこだわる気はありません。もし、そんな社会が本当につくれるんだしたら、税金でやらなくてもいいのかもしれない。しかし、僕は痛みを分かち合い、喜びを分かち合い、そして自分の幸せとみんなの幸せを調和させて、誰もが笑顔で生きていけるような社会をつくりたいと思う、そんな誇り高き国を残していきたいと思っています。

反対の方もたくさんいらっしゃると思いますけれども、もしご賛同いただけるようであれば、ぜひどこかで僕の本を読んでいただければと思います。



**不易流行**（富山経協 講演録）⑩  
ベーシックサービス

2021年6月30日発行  
無断複写禁止・転載不可

発行：一般社団法人 富山県経営者協会

〒930-0856 富山市牛島新町5番5号（タワー111ビル1階）  
TEL (076) 441-9588 / FAX (076) 441-9952  
ホームページ <https://www.toyama-keikyo.jp/>  
Eメール [info@toyama-keikyo.jp](mailto:info@toyama-keikyo.jp)